

16 前立腺癌アンドロゲン抑制療法による生体内 アンドロゲン環境の変化と生物学的悪性度

瀧澤 逸夫・西山 勉・原 昇

伊佐早悦子・星井 達彦・高橋 公太

新潟大学大学院医歯学総合研究科
腎泌尿器病態学分野

【目的】アンドロゲン抑制療法 (ADT) による生体内アンドロゲン環境の変化が Gleason score (GS) による生物学的悪性度と関係するのか検討した。

【方法】2004年5月から2006年12月までに LH-RH アゴニストとフルタミドによる ADT を行った前立腺癌患者 72 名 (T2-3N0M0) を対象とした。治療前と治療後 6 カ月後に血液中アンドロゲン値を測定した。GS ≤ 6, GS7, GS ≥ 8 の 3 群に分類し ADT 前後の血液中アンドロゲン値について検討した。

【結果】28 症例に有害事象を認め 6 カ月以内にフルタミドを中止した。ADT により血液中の testosterone, DHT, DHEA-S, androstenedione, LH, FSH, PSA は有意に低下した ($p < 0.001$ in all)。ADT 前では、血液中 testosterone 値は、GS ≤ 6 の群よりも GS ≥ 8 の群で低い傾向にあったが ($p = 0.058$)、ADT 後には GS ≥ 8 の群の方が GS ≤ 6 の群よりも高い傾向を示した ($p = 0.060$)。ADT 後の血液中 testosterone 値は、DHT, androstenedione, DHEA-S と相関していた。

【結論】ADT 後の血液中 testosterone 値は、副腎由来のアンドロゲン値とよく相関し、高悪性度癌ほど高く維持されていた。ADT 後の高悪性度前立腺癌の増殖には副腎アンドロゲンの関与が示唆された。

17 卵巣皮様嚢腫悪性転化例の検討

堀田真之介・児玉 省二・菊池 朗

笹川 基・本間 滋

県立がんセンター新潟病院婦人科

卵巣皮様嚢腫悪性転化例は、閉経後に多く発症し、20-30 代に好発する良性皮様嚢腫の 0.1-3.8% に悪性変化が知られている。最近経験した 2

症例と過去の 7 例を加えて報告する。

〔症例 1〕47 歳、本年 1 月子宮がん検診で左卵巣腫瘍を指摘され紹介受診。腫瘍マーカー、超音波・CT で皮様嚢腫と判断し 2 月腹腔鏡下両側卵巣腫瘍摘出した。肉眼所見で右卵巣皮様嚢腫と判断したが、病理診断は扁平上皮癌で、後日再開腹し卵巣癌基本術式をしたが Ic (b) 期で、抗がん剤治療を追加している。

〔症例 2〕38 歳、本年 3 月近医で左付属器腫瘍を指摘され、地元総合病院にて 4 月左付属器切除術が施行された。その後の病理診断が悪性転化扁平上皮癌で、追加治療のため当科紹介となった。治療前の腫瘍マーカー、超音波・CT は皮様嚢腫の診断、摘出物肉眼所見も同様であった。進行期は Ic 期以上、切断端陽性で、再開腹し卵巣癌基本術式をしたが癌遺残なく Ic (a) 期となった。抗がん剤治療を追加し経過している。

18 婦人科悪性腫瘍における PET-CT の有用性に関する検討

山口 雅幸・加嶋 克則・藤田 和之

八幡 哲郎・田中 憲一

新潟大学医歯学総合病院産婦人科

【目的】PET-CT による画像検査は腫瘍の質的診断が可能なることから、悪性腫瘍の診断においてその有用性が示されている。今回我々は婦人科悪性腫瘍患者の診断における PET-CT の有用性について、病変部位に注目して後方視的検討を行ったので報告する。

【対象・方法】2002 年から 2009 年まで、精査目的に PET もしくは PET-CT を施行した婦人科悪性腫瘍症例 46 名、のべ 55 件を対象とし、CT・MRI による病変指摘の有無、PET 集積所見の有無、画像検査後の手術・病理所見及び臨床経過より、各病変部位別の正診率について検討した。

【成績】悪性所見の有無について、PET・PET-CT 全体 (CT・MRI 全体) では感度 86.1% (83.3%)、特異度 84.2% (38.9%)、正診率 85.4% (69.1%)、陽性的中率 90.9% (73.1%)、陰性的中率 76.1% (57.1%) であり、CT・MRI と比

較した場合いずれの数値も高値を示した ($p = 0.037$). 直前のCT・MRIで病変が指摘された41件の内訳は(重複含む), リンパ節18件(PET正診率94.4%, 以下同様), 腹腔内11件(90.9%), 肝7件(100%), 子宮・膣5件(80.0%), 肺5件(80.0%)であった. 一方直前のCT・MRIで病変が指摘されなかった14件のPET正診率は71.4%であり, PETで腸間膜・腹膜病変を同定可能であったケースを2件認めた.

【結論】PET・PET-CTによる診断では, CT・MRI検査と比較した場合に, 特に偽陽性減少に寄与するものと考えられた. またPET・PET-CT検査は, CT・MRIでは検出困難な腹膜・腸間膜病変を拾い上げる際に有用である可能性が示唆された.

19 当科におけるRI法単独による乳癌センチネルリンパ節生検(SLNB)の検討

神林智寿子・佐藤 信昭・金子 耕司
服部 晃典・丸山 聡・野村 達也
中川 悟・瀧井 康公・藪崎 裕
土屋 嘉昭・梨本 篤・田中 乙雄
県立がんセンター新潟病院外科

2001～2008年でSLNB目的にリンフォシンチグラフィを施行した乳癌症例1497例を対象とし, RI法単独での精度と長期成績を検討した. 術前化学療法症例(NAC)113例も含む. 平均年齢53歳, 観察期間中央値43M(1～95M).

【結果】SLNBのみでの終了症例は1008例(67.3%), 腋窩リンパ節郭清(Ax)移行例は489例(32.7%). Ax移行例は①リンフォシンチグラフィでhot nodeの描出なしが102例②術中同定不能が54症例③病理迅速診断で転移陽性が273例, その他43例. ①と②の合計は156例で, 真の同定率は89.6%であるが, 前期と後期では85%, 94%と後期4年間で改善がみられた. (NAC症例のみの同定率は77.8%で, 奏効率別でみると, c-CR 90.3%, PR 77.8%, SD 68.8%, PD 42.9%であった.) 偽陰性率は5.7%, non-SLNにのみ転移陽性21例(2%)で, SLNBの長期成績は,

同側腋窩のみの再発が5例(0.49%), 遠隔転移が32例(3.1%)であった.

20 高齢者(80歳以上)肺癌に対する手術治療成績

北原 哲彦・小池 輝明・大和 靖
吉谷 克雄・斎藤 正幸・土田 正則
渡辺 健寛・金沢 宏・諸 久永
富樫 賢一・古屋敷 剛・吉井 新平
青木 正・井上 政昭・林 純一
新潟呼吸器外科研究グループ

【目的】本グループに登録された80歳以上肺癌手術例につき, 術後合併症と成績につき検討した.

【対象】2001年から2008年までに, 本グループに登録された肺癌手術例5119例のうち, 手術時年齢が80歳以上であった401例を対象とした. 男性271例, 女性130例で, 年齢は80～92歳(中央値81), 術式は葉切247例, 区切45例, 部切104例, 試験開胸4例であった. 病理病期は, 0期2, I期328, II期27, III期41, IV期3例であった.

【結果】手術死亡は1例(0.24%), 在院死亡は4例(1%)で, 死因は肺炎3, 呼吸不全1, 脳梗塞1例であった. 術後合併症は, 80例(20%)に発生した. 内容は, 肺漏, 不整脈, 肺炎, 譫妄, 呼吸不全, 気管支瘻, 気管支喘息発作, イレウス, 間質性肺炎, 低酸素血症などが多かった. 術後5生率は54.1%であった.

【結語】80歳以上の高齢者肺癌手術は, 合併症発生率はやや高いが, その治療成績はほぼ満足できるものであった.

21 食道癌術後骨転移症例の検討

市川 寛・小杉 伸一・羽入 隆晃
石川 卓・矢島 和人・神田 達夫
畠山 勝義

新潟大学医学総合研究科
消化器・一般外科学分野

【背景と目的】食道癌術後血行性再発はリンパ行性再発と比較して予後不良であるが, 転移臓器